宗教的な寄付とコミュニティー
—アメリカのメノナイト教会の事例から—

中　朋美*

Religious Contribution and Community
—A Case Study on American Mennonite Congregations—

NAKA Tomomi *

キーワード：寄付，メノナイト，コミュニティー，キリスト教，アメリカ
Key Words: Charitable Contribution, Mennonites, Community, Christianity, United States

Ⅰ．はじめに

「この男性はメノナイト？（Is this guy a Mennonite?）」「じゃ，彼女は？（How about her?）」

アメリカのプロテスタント系のメノナイト教派機関である Mennonite Church USA（以下 MCUSA）のホームページに掲載されている「メノナイトって誰？（Who are the Mennonites?）」という 4 分弱のビデオの始まりのシーンである[1]。問いかけのナレーションとともに，様々な人々が画面に映し出される。最初は中年の黒人男性，次は白人の女性，その後はサリーを着たアジア系の年配の女性と様々な年齢，人種やエスニシティーの人々が続く。画面には緑色でチェックマークが映し出され，答えはすべてイエスであることがわかる。そしてアーミッシュとは違って，だれがメノナイトなのかは見た目ではなかなかわかりにくいとのナレーションがある。続いて，そもそもメノナイトとは誰かについて説明するためにその歴史と信仰についての手短な解説がある。

宗教グループの中には，人種，民族，エスニシティーと複雑な関係をもつものがあり，アメリカのメノナイトもそういったグループの１つである。メノナイトの教義を理解し信じるならば，教会員にはなれる。しかしその一方，教派の慣習や教派内における様々な動きを十分に理解するには歴史的な発展に伴う文化的，社会的背景を考慮することが欠かせない。たとえば，ヨーロッパの宗教改革期に誕生し，その後各地で広く迫害をうけて北米に渡ってきた人々が教派の発展の中心になったという点，そのため 1960 年代ごろまではドイツやスイスといったヨーロッパ系の教会員が多かった点などは現在のアメリカのメノナイト教派に大きな影響を与えてきた。実際，「メノナイト」という言葉は，単に宗教所属だけでなく，特定の文化的背景やエスニシティーを共有する人々を意味する場合もある。

しかしメノナイトの人々，特にメノナイト教派の教会員の人たちの顔ぶれは急速に変化しつつある。布教や人道的支援活動などを通じて，いまや世界各地に多くのメノナイト教会があり，現地の人々が参加している。アメリカ国内においても同様で，様々な人種，エスニシティーの人々がメノナイト教派に加わり，もはやヨーロッパ系で特定の歴史的背景を共有していた人々が常にマジョリティーであるとはいいがたい。先に述べたビデオはそういった現状を受けて，メノナイトとは何かを問いかけているのである。

* 鳥取大学地域学部地域文化学科

本論文では，宗教的な寄付の様子をめぐる意見を詳しく考察しながら，メノナイト教会員の宗教的なアイデンティティーの変容や揺らぎの一部を紹介する。宗教的な寄付とは，信仰を理由に宗教組織やその活動に対して贈る金銭的な援助のことで，ここでは特に寄付をする側の理由や寄付に対する考え方を分析する。具体的には２つのメノナイト教会を事例とし，①同じメノナイト教会の信者であっても，寄付に対する意見や見解が異なること，②その相違はメノナイト教派や教会といった宗教的なコミュニティーに対する考え方やその将来像の相違に深く関連することを指摘する。事例を通じて,宗教的な寄付の動機や実践の様子を寄付者の側から詳しく調査することは,信者の人々が考える，あるいは理想とする宗教的なコミュニティーがどんなもので，それがどのように外の社会やと関係しているのかを把握する重要な手がかりとなるのではないかということ示唆できればと考える。

II．寄付

マルセル・モース（Mauss, 1990[1925]）の贈与論にあるように，金銭や物品を贈り与えるということは，単なる経済的な行為だけではなく社会的な重要性を持つことがあり，この点については社会学や人類学的な視点からなどさまざまな研究がなされてきた[2]。特に金品の受け取りによって，それを受け取る側と贈る側との間に何らかの関係性が生じたり，関係が変化したりすることが多く，その点の考察が深められてきた。近年は贈与といっても多様であることが指摘されている。たとえば，インドのジャイナ教で行われている贈与の研究では，贈与で生じる関係性の構築そのものを否定しようとしているとの考察がある（Laidlaw, 2000）。

ジャイナ教の例にあるように，多くの宗教団体では何らかの贈与が行われることが多い。これらの宗教的贈与は，寄付，献金，お布施等様々な名称で呼ばれ，それぞれ微妙に意味合いが異なるが，ここでは便宜上，寄付という言葉で統一して表していく[3]。これらの寄付はしばしば，信仰心を表す重要な行為とされるが，誰に，どのように寄付をするのかには違いがある。たとえば，仏教徒の中にはサンガと呼ばれる出家修行者の集団への寄付が推奨される場合がある(Brekke, 1998; Gombrich, 1993)。またイスラム教では，貧困に困っている信者仲間を支援することが特に重要だとされる時もある(Kochuyt, 2009)。

これに対し，この論文で取り上げるメノナイトを含むキリスト教では，一般に誰を優先して援助するべきかといったはっきりした基準はなく，ユニバーサルな（普遍的な）慈善行為が奨励されているとされる（McCleary, 2007）。すなわち，キリスト教信者として，困っている人を助けることは，重要な信仰心のあらわれとされるものの，自分と同じ信仰をもつ人を特に重視すべきだとは考えられていない。また誰にどれだけ贈るかといった寄付の実践に関しては，信者ひとりひとりの判断に任されていることが多い。

こういった宗教的な寄付は様々な場所において行われ，社会的な役割を担っている場合が多い。中でもアメリカでは，宗教的な動機による寄付が多く社会福祉事業や慈善事業を支えている。2013 年では，3,350 億ドルの慈善的寄付があったが，このうち宗教関連機関の慈善，社会，教育関連事業への寄付は，寄付全体の 31％を占めている（Giving USA, 2014）。これは宗教関連機関への寄付のみの数字であるが，これに加え宗教的な理由を背景に広く社会に貢献する事業への寄付もあると考えられ，その経済的，社会的影響力は大きく，その実践の様子に対する研究の必要性が指摘されている[4]。

これまでのキリスト教の寄付に関する研究の多くは，どのような人が寄付をするのかといった寄

付者の特徴を明らかにしようとするものが多く，所属する教派や教会行事の参加度，家族構成などによって寄付の頻度や額の傾向が異なることを示す調査が主流である[5]。しかし，宗教と寄付との関係についてのもっと根本的な問い，すなわち教派や教会参加度といった特徴がどんな理由で，どのように宗教的な寄付と関係があるのかについてはあまり研究が進んでいない。ただし例外として，宗教的な寄付の意味について研究した研究はいくつかあるが，その主な対象はキリスト教福音主義や原理主義教会の信者に限定されている。そこでは，即興的でしばしば法外と思えるほどの額の寄付がなされており，そういった寄付が信者にとって回心体験の追体験や神への信頼を表現するものとして重視されていると指摘がある[6]。しかし，キリスト教信者は福音主義教会にのみ代表されるものではなく，またすべての教会において即興的で人目を引くような寄付が奨励されているのかといった疑問が残る。この論文においては，福音主義傾向があまり強くない教会を含めた 2 つのメノナイト教会を取り上げながら，宗教的寄付のさまざまな意味を探る。

III. メノナイト

はじめにで述べたように「メノナイト」という語は文脈によって，特定のエスニシティーや文化的背景をもつ人，教派に属する教会員を指すなど多義的である。たとえば現在メノナイト教会員でなくてもメノナイトとして育ったと表現される場合もある。この論文では混乱を避けるため，教派，教会員あるいは信者等でその意味を明らかにする。同じようにメノナイト教会（Mennonite Church）という言葉も様々な意味で用いられることが多く，メノナイト教派全体を指す場合のほか，礼拝等を行う建物やそこを中心に活動を共にする共同体を指すことがある(後者の場合は小文字の church)。またかつて Mennonite Church はメノナイト教派の中の一団体を指すことがあった。随時，教派，教会という表現を用いながらできるだけ区別をする。

メノナイト教派はキリスト教プロテスタント系のグループの 1 つで、再洗礼派(アナバプティストとも呼ばれる)に属する教派である。そのルーツは 16 世紀のヨーロッパで誕生したアナバプティストムーブメントと呼ばれる運動にあり，同じ再洗礼派の中には，車の所有や電気の使用を拒否しているオールドオーダーアーミッシュや，信者同志で共同生活を行っているハテライトと呼ばれるグループもある。

メノナイト教派の基本的な教義は，ほかのプロテスタント教派と共通する点が多いが，そのなかでも聖書の教えに反する行動や価値観から距離を置くことを重視する点が特徴的である（Redekop 1989）。例えばメノナイト教派は平和主義をとっているが，それは力によって物事を実現させたり解決したりするといった武力行使や戦争が，自分たちの信仰的価値に反するものであるとの考えによる。またキリストの教えを守り，社会的弱者へ援助をすることも重要視されている。もちろんほかのキリスト教派でもこういった態度を大切なものとするグループがある。ただ，メノナイト教派に関してはこの点，すなわち自分たちの信仰に基づく生活を貫くこと，そして必要ならば，自分たちのキリスト教観に基づかない外のコミュニティーや慣習との距離を置くことが歴史的に特に重要視されてきたとされる（Dyck 1990）。そのため，時として周囲の理解を得ることができず，ヨーロッパの各地で迫害を受けた歴史がある。そしてその信者の一部が 17 世紀後半からアメリカに渡り，それが現在の北アメリカのメノナイトの始まりとなっている(MacMaster 1985; Ruth 2001)。

メノナイト教派としては，経済活動一般に関しての特別な規定はない。しかし信者間の相互援助や社会的弱者へのサポートを重視していることから，さまざまな支援活動に参加してきた。たとえば，20 世紀初め，政情が不安であったロシアに住むメノナイト信者へのサポートや，第二次世界大

戦後のヨーロッパの復興への様々な救援活動はよく知られている(Redekop, 1989)。またそれ以外にも，ハリケーンや洪水による災害復旧援助活動，フェアトレード手工芸品販売，マイクロファイナンスといった途上国および先進国の貧困状態の人々に対する支援活動が継続的に行われており，多くのメノナイト教派関連機関が支援し，職員として，あるいはボランティアとして教会員が参加している。ただ，そういった支援にどうかかわるかは，教会員各自の判断に任されている。同様に，寄付に関しても，教会員個人の自由で柔軟な発想や信仰の表現の可能性が認められている。しかしその反面，自己の信仰を寄付といった形でどう表現していくのかという課題も各自が取り組まなくてはならない。

現在のメノナイト教派にはサブグループが多くあるが，大まかな分類では３つに分けることができる(図 1)。これらの分類は，適切な服装といった生活様式やリクリエーション等についての宗教上の解釈の違いと関連する。オールドオーダーグループは，車の所有しない生活でよく知られているが，このほかにも，日曜学校といった組織的な宗教的教育を教会で行わず，服装にもいくつかの特徴がある[7]。これに対し，車の所有といった変化を部分的に取り入れているのがコンサーバティブグループである。そしてこれらに加え、衣服等の制限がほとんどなく，外見上，ほぼほかのキリスト教徒と区別がつかないそれ以外のグループがある。最後のグループに所属する教会員数が最も多く，およそ全体の 70%を占める[8]。そのためもあってかこのグループを指す一般的なサブグループ名は確立されていないが，ここでは便宜上，リベラルグループと呼ぶ。これは必ずしも政治的，宗教的な傾向を指すものではない。この論文ではこのリベラルグループの２つの教会を事例とする。このグループを選んだのは，他のキリスト教会と共通する点が多く，この事例をほかの事例と関連させやすいと考えられるためである。

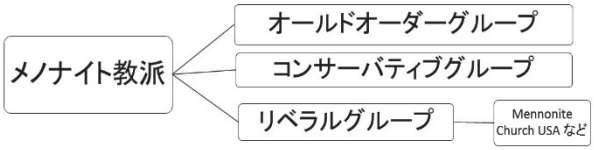

図 1　主なメノナイト教派のサブグループ

Ⅳ. ２つの教会

この論文で対象とするのはヒルサイド教会とフェアビュー教会の２つの教会に所属する教会員である。いずれの教会も図１の分類でいえばリベラルグループの教会で，その中でも最も大きい団体の１つである Mennonite Church USA(以下 MCUSA)に属している。MCUSA はアメリカ全土に及ぶ大きな団体であるので，組織上さらにカンファレンス(conference)とよばれるグループで構成されている(図 2)。ほかのリベラルグループの教会と同じように，教会員の衣服やリクリエーション等の規則は少ない。これら２つ教会を選んだ理由としては，比較的近くに

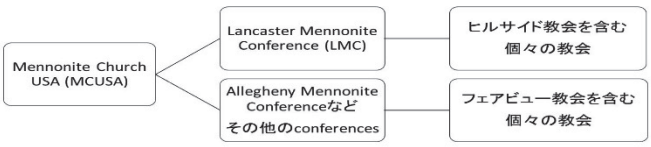

図 2　Mennonite Church USA の組織図

あり（教会間の距離は直線で約５キロ），同じような地域特有の経済や社会事情の中で生活している教会員が多いということがある。

２つの教会は，ペンシルバニア州ランカスター郡にある。この地区には古くから多くのメノナイト教会があり，その種類，宗教的傾向も多様である。この地区の代表的な MCUSA の下部組織は Lancaster Mennonite Conference(以下 LMC)であるが，その他のカンファレンス所属教会もある。ヒルサイド教会は LMC 所属で，フェアビュー教会は LMC 所属ではない MCUSA の教会である(図２)。

ヒルサイド教会は 20 世紀の初めにランカスター郡の町に建てられた教会である。当時多くのメノナイト教会は町から離れたところにあったため，町に住むメノナイト信者は教会まで通うことが容易でなかった。そういった人々にも通いやすいようにと建てられたのがヒルサイド教会で，当初から伝道活動に力がそそられていた。現在の教会は町中から少し外れた場所に移ったが，そういった活動は形を変えて続けられている。たとえば，地域の若者が集まり時間を過ごすための場所の提供やイベントを開いたり，子供たちのための保育サービスを提供したりと地域住民との接点を作ろうとしているプログラムがいくつかある。そういった活動の影響もあって，以前はどの教会にも行っていなかったが，現在は教会員として活躍している人もいる。ヒルサイド教会員の多くは地元出身者で，大学を卒業した人はそれほど多くなく，大半の教会員は地元にある中小企業に勤めている。

一方，フェアビュー教会は戦後に建てられた教会である。この地域にはメノナイト教派機関や関連団体のオフィスがいくつかあり，そこで働くために，アメリカ各地から移住した若いメノナイト信者が多くいた。こういった人々が中心になって 20 世紀半ばに建てられたのがこの教会である。他の地域出身などの理由で地元の教会の慣習になかなかなじめない人にとっても受け入れやすいようにとの配慮もあり，フェアビュー教会は LMC には所属しておらず，別のカンファレンスの一員である。ヒルサイド教会と同様，様々なプログラムを地域に提供しており，また教会員の中にはメノナイト以外の家庭で育った人，教会に行っていなかった人もいる。ほかの人にキリスト教を伝える伝道活動も行われているが，メノナイト教派が従来重点を置いてきた社会的弱者やコミュニティー内の相互援助といったことにも積極的に取り組んでいる。教会員の中にはメノナイト機関で職員として様々な地域や国で勤務した経験者が多いこともあり，仕事や奉仕活動などで１年以上の海外経験がある人が多い。ヒルサイド教会と比較すると，フェアビュー教会員は大学卒業，あるいはそれ以上の学歴をもつ人が多く，専門的な職業（医師，カウンセラー，看護師など）についている人の割合も高い[9]。

Ⅴ. ヒルサイド教会での寄付：メノナイトの伝統と福音伝道との微妙なバランス

ヒルサイド教会での寄付をめぐる議論の特徴は２つある。１つは，メノナイト教会組織に対する計画的な寄付が奨励されていること，もう１つは，キリスト教を伝道する活動への金銭的な援助としての寄付が特に強調されていることである。これらの特徴を順に見ていくことで，ヒルサイド教会員たちのメノナイト教会員として，そしてキリスト教信者としての自分たちの位置づけについて考察する。

①教会や教会組織に捧げる計画的な寄付

メノナイトを含むキリスト教の多くの教会と同じように，ヒルサイド教会では，日曜礼拝の際に寄付の時間がとられている。キリスト教の教会によっては，その場で財布にあるお金から適当な額を決め，寄付する光景がしばしばみられる。しかしヒルサイド教会ではそういったその場での寄付

ではなく，前もって寄付を準備するという計画性が強調されている。この点で，II で述べたその場での自発的な寄付を重視する福音主義的教会の研究とは異なる。ここで見られる寄付の計画性の重視はヒルサイド教会だけの傾向というよりも LMC 所属の教会でもよく見られる特徴である。

計画的に収入の一部を教会等の活動に寄付することが奨励されている様子は，たとえば，ヒルサイド教会の役員や教会員の多くが参加するスチュワードシップユニバーシティー（Stewardship University）で行われたセミナー形式の講座に見ることができる。スチュワードシップユニバーシティーとは，大学ではなく，メノナイト教会関連の金融機関であるエヴァレンス（Everence，旧 Mennonite Mutual Aid)が企画し，各地で年に 1 回ほど開催しているイベントである。この世の様々な資源は神から人間に管理をゆだねられたものであるとの視点から，メノナイト教会員に信仰について多方面にわたって考えてもらおうという企画である。メノナイト信者が多い地域を中心に開催され，ランカスター郡ではほぼ毎年開かれている。スチュワードシップユニバーシティーは，必ずしも LMC の人に限定されたイベントではないが，ヒルサイド教会を含む多くの LMC の人々が参加する。

様々なセッションがあるスチュワードシップユニバーシティーであるが，その中には寄付に対する考えをうかがわせる講座がいくつかある。たとえば 2005 年に開かれた LMC のスタッフによる講座の 1 つでは，寄付と信仰について特に取り上げられていた。そこではまず参加者に対して，聖書の箇所をたくさん引用しながら，教会に対する寄付は聖書の教えに基づくものであること，そして寄付は信仰心を表現する重要な行為であることが説明された。その際，特に強調されていたのが，寄付をする準備をあらかじめするということである。旧約聖書の箴言やレビ記などを引用し，収入の中の最も良いものを神に捧げること，また収穫の 10 分の 1 は神のものであるとの説明をし，参加者に収入の一部は神のものであり，それを残りの収入とは区別し神のために使えるようにあらかじめ準備する必要性が繰り返し述べられた[10]。

説明の後，準備をして計画的に収入の一部を寄付できるようにとワークシートが配布され，今までのポイントが再び強調された。配布されたワークシートは一般的な家計簿と同様に，まずすべての収入を書きだし，そこから税金を引き，実際に使える額を確認する作業が組み込まれており，まず収入に見合った消費を行うことを信者に奨励している。通常の家計簿との違いはそれに加え，実際に使うことのできる金額から 10 パーセントの額をまず差し引く欄を設けている点である[11]。 こうすることで，寄付を行うことは信者としての務めの 1 つであること，そして，それを計画的に最初に差し引くことによって，収入の一定のパーセンテージを最初に寄付するものとして取り分けることの習慣づけを促している。司会者はその点について説明し，参加者だけでなく彼らが所属する教会の間でも使ってみてはどうかと提案していた。

教会への寄付ためにあらかじめ一定の金銭を準備しておくことの重要性はほかの講座でも強調されている。この年はこの他に，教会の財務担当者を主に対象とした講座があり，そこでもこの点が強調されていた。財務担当者対象ということで，寄付の宗教的な重要性のほかに，計画的な教会への寄付，特に 10 パーセントの教会への寄付をどのように教会員に広めていくのかに焦点がおかれていた。その取り組みの一例として，ある教会の日曜礼拝時の寄付収集の様子が紹介された。この教会では，以前はほかのメノナイト教会でもよくおこなわれているように，各週に特定の寄付の使用法をあらかじめ取り決めたうえで寄付を集めていた。たとえば第 1 週は MCUSA への寄付，第 2 週はメノナイトミッション活動への寄付といった形である。しかし，これでは得た収入の 10 パーセントは最初から神のもので捧げるためのものだという点がはっきりしない。そこでこの教会では，

教会員との議論の上，毎週教会で集められた寄付の 10 パーセントを自動的に，教会の直接の上部団体であるカンファレンス（この場合は LMC)に捧げるように変更をした(図 3)。その理由は次のようなものである。10 パーセントは神のもので，それは信仰上のリーダーとなる存在に捧げられるべきである。一般の教会員は所属教会に，教会は教会運営を指導する教会機関である LMC に捧げるべきである。やや機械的ではあるが，教会全体で 10 パーセントという目安を前面に出すことによって，信者が収入の一部を教会や関連活動のために取り分け，捧げるように促そうとする試みである。この講座では，この教会の財務担当者が出席しており，一連の取り組みはおおむね好意的に教会員にうけとられ，寄付額も伸びているとの報告があった。司会者は，ほかにも方法があるだろうが，寄付の宗教的な重要性の認識を高め，一定の金額を教会のために捧げる計画的な寄付を促進する方法を各教会でも話し合ってみてはどうかとの提案でこの講座を終了した[12]。

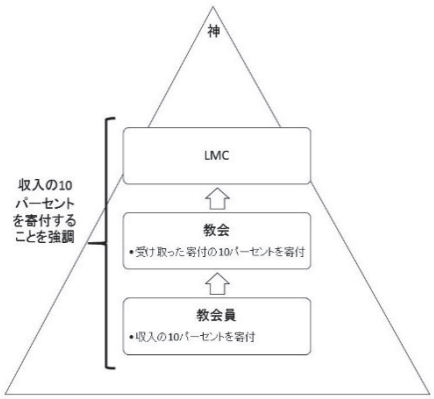

図 3 10 パーセント寄付の例

もっとも，実際の教会員は必ずしもその割合で寄付しているとは限らない。実際の寄付の額の研究は困難で数も少ないが，2007 年に出版された調査によるとおよそ 6 割の教会員が収入の 10 パーセントを教会やその他の慈善的な団体等に宗教上の理由から寄付をしたとの報告がある（Kanagy, 2007, pp.115-116)。しかしそれよりもここで重要なのは，一定の収入をあらかじめ準備しておく形の寄付が理想とされ，奨励されている点，そして，ワークショップの例にあるように，宗教的な寄付の宛先として，メノナイト教会や教会組織が主に考えられている点である。所属教会やメノナイト教会はいわば信仰のリーダー的立場にあって，教会員は信者としてそれに従い寄付を行うべきだとする考えが表れている。

②福音伝道のための寄付

ヒルサイド教会での寄付をめぐる議論の 2 つめの特徴は，宗教的寄付の対象として，キリスト教の教えをほかの人々に広める福音伝道活動を重視する点である。メノナイト教派だけでなくキリスト教一般の宣教活動が視野に入っている点で①とは強調点が少し異なる。ヒルサイド教会の礼拝や教会員の会合では伝道活動し支援することは素晴らしいものとされ，教会員が進んで援助した話は教会の模範的な例としてしばしば語られる。

たとえば次のような話がある。数年前，この教会にネパールで宣教活動をしている人がその活動を紹介しにやってきた。その人は伝道の様子を語った後，現地の人のためにランプを購入しようと考えていると語った。ランプは聖書を贈るといったように，直接的な伝道ではない。しかし光のないところに光を届けるということによって，現地の住民が聖書を読み，キリストの教えを理解するにことにつながればと考えていると説明し，加えて，現状ではランプを贈るだけの十分な資金がないとのコメントがあった。それを聞いたヒルサイド教会の人々は早速，ランプ 50 個購入できるだけの寄付を集めはじめた。しばらくしてランプ 41 個を購入できるだけの寄付は集まったが，まだ目標額には届いていないとの報告が教会であった。するとすぐに，残りのランプ 9 個分の寄付が無記名で送られてきて，無事に目標額を達成できたという出来事である。

これに似たような話はいくつかあり，複数の教会員の中で語られ，この教会員の様子を語るエピソードとして紹介される。これらの話の共通点は，聖書の教えを広めるための活動への教会員の迅速で気前のよい援助である。ランプは現地の生活支援という性質も持つが，最終目的は現地の人々と交流を持ち，キリスト教を知り，改宗や回心をしてもらうためで，ランプはその手段の一つとして紹介されている。ランプの話のようなエピソードを通じて，伝道という明確な目的を持つ活動への金銭的支援が強調され，教会員の快い機敏な寄付が素晴らしいものとして描き出され，福音活動への自発的な寄付が理想のものとされ，推奨されている。

福音伝道活動への寄付のお願いは，しばしばヒルサイド教会の礼拝で紹介されたり，教会員のメールボックスにお願いの手紙が配されたりといった形でなされ，教会員が伝道活動をサポートする機会はたくさんある。また実際に福音伝道活動へ参加する教会員も少なくない。たとえば 2004 年から 2005 年の間には，YMCA （Young Men's Christian Association)が企画しているスワジランドでの伝道や，ニューヨークシティーといった都市での路上伝道に参加する教会員がおり，その紹介と寄付のお願いがあった。これらの活動のように，伝道活動はメノナイト以外の教会機関主催の活動も含んでおり，メノナイト教派主催の活動かどうかにかかわらず，教会員が寄付する光景がしばしばみられる。また 2005 年には教会としても教会員の伝道活動を支援しようと，その活動費用の 3 分の 1 を教会から支出することが決定された。残りは個人的な寄付や自己資金で賄わなければならないが，こういったお願いは年に数回は行われることから，教会として贈られる活動援助としての寄付の額は少なくはない。

福音伝道のための寄付では，①で述べたような計画性や 10 パーセントという数値目標は掲げられていない。ネパールの活動や YMCA といった伝道活動への支援は，あらかじめ教会で計画されていたものというよりは，特別なその場でのアドホック的な寄付である。ここではそうした活動への寛容な寄付が奨励されている。さらに寄付の対象はメノナイト教会に限らず，メノナイト教派を超えて，ひろくキリスト教を伝道する活動である。またそれらの活動は世界各地に及ぶことからアメリカといった地理的に限定された地域でもない。①とは異なり，ここでヒルサイド教会員のまなざしは，世界的な福音伝道主義のキリスト教コミュニティーに向けられている。

ヒルサイド教会で見られたこれら 2 つの特徴はいずれも，寄付が信仰心の表現の 1 つとして重要視されていることをうかがわせるものである。どちらもメノナイト教派を含むキリスト教に対して金銭的な援助をしようとするものであり，重なる点が多い。寄付を通じてメノナイト教会組織を支援することは，教会が行う様々なキリスト教的な活動を支援することにつながる。またキリスト教布教は信者を増やすことであり，メノナイトの教えやメノナイト教会員を増やすことにもつながる。

図 4　ヒルサイド教会の寄付の 2 つの強調点の関係 1

しかし①と②の寄付では，対象としているコミュニティーは微妙に異なる。①の対象はメノナイト教会及び教派への支援であって，教会員はメノナイト教会・教派の一員としての寄付である。②では，キリスト教伝道活動を広く支援するという形をとっており，支援が向けられる対象は福音伝道を盛んに行うキリスト教信者の集まりである。図 4 にあるような時には，この 2 つの寄付の対象としてのコミュニティーの違いはあまりない。しかし時にはこの 2 つのコミュニティーにずれが生じてしまうことがある(図 5)。その際，教会員が支援し，参加活動していきたいとするコミュニティーは一致しない。またずれを感じるかどうかは，教会員の中で必ずしも一致しているものではなく，年齢や性別等で異なる場合がある。寄付の 2 つの強調点はそういったずれの可能性を浮かび上がらせており，この 2 つの点からみると，ヒルサイド教会の中での意見の対立を理解しやすい。

図 5　ヒルサイド教会の寄付の 2 つの強調点の関係 2

たとえば讃美歌といった礼拝での音楽をめぐる意見の衝突がある。メノナイト教会では伝統的に男女がそれぞれ低音，高音に分かれる 4 部で讃美歌が歌われてきた。また無伴奏や，ピアノやオルガンを伴奏としたものが中心であった。しかし若い人やメノナイト教派以外の教会から移ってきた人の中では，4 部で歌う讃美歌を古臭いと感じたり，インスピレーションをあまり感じないと考えたりする人がいる。このためヒルサイド教会では，多様な人々を受け入れようとバンドを用いた現代風の音楽が数年前から礼拝で用いられるようになった。しかし礼拝での音楽は教会での宗教的な体験として重要で，特に長年にわたって教会員として活躍してきた年配の人々の中には伝統的な讃美歌も時には歌ってほしいという声が根強い。この問題は，単に音楽の好みの問題だけではなく，従来のメノナイト風の礼拝を残すのか，あるいはほかの福音主義的な教会のように変化していくのかといった点に関連する意見の違いとも関係する。ヒルサイド教会の中には，メノナイト教会の歴史や背景は，福音伝道の基礎であって重要だとする意見もあれば，そういった歴史こそが福音伝道を中心として教会が発展していくための足枷となるとする見方がある。前者では図 4 のようにとらえるか，後者では図 5 のようにとらえ，伝統的な礼拝スタイルはずれの象徴であると考える。

音楽はヒルサイド教会員の中の意見の対立の例だが，そのほかにヒルサイド教会とメノナイト教派組織との意見の食い違いも，寄付の 2 つの強調点から考えると理解しやすい。近年ヒルサイド教会では LMC，そしてメノナイト教派全体との関係を再考すべきという声が大きくなっている。問題の一つは同性愛者に対する対応である。これは最近に限った問題ではないが，2014 年には，同性愛者の女性を牧師としてメノナイト教派機関の MCUSA が認めるかどうかが問題となり，再び大きな議論になった。今回特に問題となったのは，対象となった女性が同性愛者であるのみならず，それを公言し，同性のパートナーと関係を続けていること，そしてその人を聖職者として正式に認めるかという点である。問題をさらに複雑にする背景には，対象の牧師の所属カンファレンスが彼女を任命しようとした際に手続き上の不備があったのではという点がある（MCUSA の組織については図 2 を参照）。

ヒルサイド教会としては同性婚を認めない立場をとっており，そういった人が聖職者となるのは聖書の教えに背くとしている。そしてヒルサイド教会の上部機関のカンファレンスである LMC にも反対の態度を強く表明するように要請している。しかし，LMC を含む多くのカンファレンスからなる MCUSA の中では意見が割れており，LMC も反対の立場を強く打ち出してはいない。ヒルサイド教会ではこういった LMC や MCUSA の態度に賛同しない教会員が多く，2014 年 8 月に行われた教会員全体会合では，LMC からの脱退をも視野に入れながら，メノナイト教派組織との関係について再考してほしいという意見がだされた。実際，近隣のメノナイト教会の中には，ここ数年の間に LMC を離れ，独立しているものもいくつかある。これらの教会の脱退の詳しい理由や時期はそれぞれ異なるが，メノナイトとしての伝統をいかに解釈していくかという課題がその背景にある。ここから，この問題がヒルサイド教会だけの特殊な問題ではなく，他のメノナイト教会にもみられる意見の対立であることがうかがえる。ヒルサイド教会とメノナイト教派との関係は，寄付の 2 つの強調点の関係図でみると，もはや図 4 ではなく図 5 の状態で，両者のずれは大きく，今後さらに大きくなるのではないかとの見方が強い。ヒルサイド教会は，この点についての 2014 年夏の段階ではまだ結論を出していないが，引き続き今後どうするのかを模索している。

ヒルサイド教会の寄付をめぐるエピソードや議論は，教会員がキリスト教信者として，そしてメノナイトとしてどういった姿を心に思い描いているのかといったことを垣間見させてくれる。特に寄付にみられたメノナイト教会と教派への計画的な支援と広くキリスト教を布教するための支援という 2 つの強調点は，ヒルサイド教会内外の意見の対立や動きを整理する上で役立つ。2 つの強調点の重なりやずれを考えることで，ヒルサイド教会員が，メノナイト教会とのつながりや外部のキリスト教コミュニティーとの関係をどのように考えるのかの大まかな方向性をうかがうことができる。

Ⅵ．フェアビュー教会での寄付：メノナイトのルーツとしての人道的支援

フェアビュー教会員の多くも，寄付を信者の重要な行為として考えている。日曜礼拝では寄付の時間が設けられており，教会内外でも寄付をする機会は多くある。しかし，ヒルサイド教会とは異なる点もある。ここでは①収入の一定の割合をあらかじめ教会へ捧げるために準備しておくという計画的寄付はそれほど重要視されていないこと，そして②キリスト教布教のための寄付というよりも貧困に苦しむ人への支援といった人道的支援や社会正義実現のための寄付が強調されていることを紹介し，ヒルサイド教会員とは少し異なるメノナイト信徒としての見解について考える。

① 信仰心の表れとしての寄付

フェアビュー教会員の多くも，聖書に述べられた収入の 10 分の 1 を基本として，教会や教派の活動に捧げる形の寄付については理解しており，そのような寄付をしようとする心がけはよいものであると一般的に考えている。しかし準備することや計画性を大切にするよりも，金銭を神に捧げ，よりよい社会のために貢献しようとする寄付の背後にある信者の思いが重要だとする意見が強い。たとえばある教会員は，ある一定の額を寄付するということは，キリスト教の考えを実践する上の一つのステップではあるが，そういった額や計画に固執してしまうのはあまりよくないと説明した。そして，それよりも大切なのは神やキリスト教の教えの実現のために心から金銭をささげるという気持ちではないかと指摘した。このコメントはやや抽象的ではあるが，フェアビュー教会員の寄付に対する同じような考え方はほかの場面でもみられる。

たとえば，2005 年のはじめにおこなわれた聖書勉強会では，寄付についてのフェアビュー教会員

の見解が垣間見られた。当時この勉強会では，教会員 10 名ほどが集まり，新約聖書にあるコリントの信徒への手紙 II の 8 章と 9 章を勉強しており，パウロが施しや宗教的な寄付について論じている箇所について議論をしていた。ちょうど 2004 年の年末におこったスマトラ島沖地震と津波の被害に対してのアメリカの国としての援助がニュースになっていた時期で，それを取り上げながら，よい寄付とよくない寄付についての会話に発展した。当時のニュースでは，アメリカの地震被害の救援のための寄付を称賛することよりも，当初のアメリカの寄付が他国に比べ少額であるとの批判をうけ，ブッシュ大統領が増額したという点が話題となっていた。このニュースの概要を振り返った後，教会員は互いにどう思うかを述べあった。ある教会員はブッシュ大統領の寄付の例をよくない寄付の例とし，寄付といってもただすればよいというものではなく，そういった寄付をしようと思う気持ちが重要だと指摘した。別の参加者が付け加えて，ブッシュ大統領の件は，周囲の目を気にして増額したのであって，心からの寄付というのではないのではないかと語り，さらにもう一人の参加者はそれまでのコメントをまとめ，問題は寄付額というのではなく，気持ちであると語った。続いて寄付とはどのようなものなのかということについても意見が交わされ，寄付はよい説教をきいたのでといったような何らかのサービスの対価として出されるものではなく，神からの恵みなどに対する感謝の気持ちとしてするべきだという発言があった。

この会話でも，寄付の額の多寡ではなく金銭を捧げて復興等の活動に使ってほしいという気持ちの誠実性が重要で，それがよい寄付の基本であるとの見解が主流である。ブッシュ大統領の例は，後に増額したことからうかがえるように他国との額の比較をしており，そもそもできるだけの支援をしたいという気持ちが足りないのではないかという点から，よくない寄付とされている。また会話の最後にあるように，寄付を捧げたいとする気持ちの面からは，あらかじめ準備する 10 パーセントの寄付にも疑問が残るとされる。計画性の重視は，物やサービスの対価としての金銭の支払いという面が強調されやすい。その場合，自発的に進んで金銭を捧げる気持ちが薄れてしまうのではないかという懸念がある。神によって寄付をすることができる恵みがあることは前提であるが，寄付はそれに対しての支払いというよりは，恵みをうけたものとしての自発的な反応であるべきだという意見がよく聞かれる。これらの理由からフェアビュー教会員の中では計画的な寄付という面はあまり強調されていない。

② 社会正義実現や人道的支援としての寄付

ヒルサイド教会の人々とは異なるもう 1 つの点としては，寄付の宛先として福音伝道活動が必ずしも最重要なものとして表現されていないことがある。ブッシュ大統領の寄付をめぐる会話では，キリスト教自体を広めるといったことは特に問題とはなっていない。むしろ，食糧や医療の援助といった人道的支援のための寄付を想定している。またフェアビュー教会では，地域の課題，たとえば地元で活動するホームレスシェルターへの支援の必要性などが紹介されることがしばしばある。フェアビュー教会内外での寄付のお願いの際も，支援を受けた人々が回心し，メノナイトあるいはキリスト教信者として教会に参加することへの期待は前面には出されない。むしろ，キリストのように，弱者のために尽くすことが重視され，人々が人としてよりよい生活を送るための援助のお願いと位置づけられる時が多い。

福音伝道のための活動援助としての寄付があまり強調していないフェアビュー教会ではあるが，だからといってメノナイト教派という背景を軽視しているわけではない。III でも触れたがメノナイト教派では，聖書とキリストの教えを守り，弱者を助けていこうと様々な活動をしてきた歴史がある。メノナイト信者として，社会にある様々な問題に染まるのではなく，距離を置き，理想的な社

会の実現に努力すべきという点も強調されてきた。このことからフェアビュー教会の人々が広く人道的な支援を強調することは，ただ単に市民や社会の一員として重要なのではない。それに加え，メノナイト教信者としても大切であるとされ，メノナイト教派のルーツと人道的支援や社会的正義実現への努力は重なるものとして理解されている(図 6)。

図 6　フェアビュー教会の寄付の強調点の関係

実際，フェアビュー教会では人道的支援を重視しているが，メノナイト教派の幅広い援助活動参加の歴史や現在のプログラムの様子も紹介され，それらが信仰と深くかかわるものであると説明されることが多い。教会の礼拝や会合では，メノナイト教会関連機関でおこなわれている国内外での災害支援，開発援助，精神病患者への待遇改善支援といった活動の紹介がしばしば行われる。また教会員の中には，そういった機関で働く人やボランティアをした人が多くおり，その体験の紹介がある。たとえば精神病患者のためのメノナイト関連施設で勤務する人が日曜礼拝で日々の活動を紹介するという場面や，災害復興のために清掃や建物建設のボランティア活動をしている様子の報告があり，それとともにそれらの経験と信仰について話すといった場面がみられる。これらの話の中心は，被支援者をキリスト教やメノナイト教派に回心させたというものではない。活動を通じて，被災者や困窮状態にある人と寄り添い，そのことでキリスト教や聖書の教えを自ら振り返る機会を得たということが語られる。こうした語りを通じ，フェアビュー教会では，社会的弱者や経済的に困難な状況に直面している人に対する援助活動が，メノナイト教派の重要な側面であり，信仰を考え，実践するうえで重要であると印象付けようとしている。

寄付をめぐるこういった傾向から，フェアビュー教会における教会や教会員とメノナイト教派との関係や外部とのつながりについての考え方は，ヒルサイド教会のものとは少し異なったものであることがうかがわれる。まず組織的で計画的な寄付というよりも感謝の表現としての寄付の動機が重要視されており，メノナイト教派組織内の上下関係は寄付の上ではあまり強調されていない。また寄付をする対象は，福音伝道活動が主眼であるとはされていず，社会的弱者の生活向上といったような広い社会的な貢献が含まれる。そしてそういった活動への援助が奨励され，それを通じてキリスト教およびメノナイト教徒としての振り返りや成長が重要視されている。フェアビュー教会の人々にとって，寄付を通じてかかわろうといる人々は，宣教すべき人々だけではない。精神病患者の支援といったように地理的に近い地域に住む人，そして世界各地で病気，貧困，災害などによって困っている人々に重点が置かれている。

ヒルサイド教会と同様にフェアビュー教会の寄付から見る 2 つの特徴は，フェアビュー教会とMCUSAとの関係といったメノナイト教派組織やその他のキリスト教団体等との関係を理解するのにも役立つ。たとえば同性愛者に対する対応は，ヒルサイド教会でも難しい課題の１つである。しかし，ヒルサイド教会とは異なるカンファレンスに所属していることもあり，その対応も異なる。フェアビュー教会はセクシャルオリエンテーションの多様性についてすぐに否定してしまうのではなく，まず社会的な弱者であるかもしれない同性愛者の視点をじっくり考え，そのうえでどのよう

に聖書やキリストの教えを実現すべきか検討しようとする。またフェアビュー教会が属するカンファレンスもそういった態度を認めている。そのため同性愛者の牧師任命の件について直ちに反対という立場を取らないことに対しての批判の声は大きくない。また，多様な性のありかたを認めようとするほかのメノナイト教会との関係や，社会福祉の分野で活躍しているメノナイト教派以外のキリスト教団体との関係を築いていこうとする動きがある。メノナイトとしての伝統や歴史を踏まえつつも，近隣の地域や世界各地の人々がより良い生活を送るための教会としての方向性を探っている様子がうかがえる。

VII. まとめ

ここでは 2 つのメノナイト教会を例に，寄付という観点から，信者たちがどのようなコミュニティーを思い描いているのかを考察した。どちらの教会もキリスト教徒，そしてメノナイト教派の信者として，聖書の教えを守り，それに基づいて金銭を捧げることを重要だとしている点では変わりがない。しかし寄付の考え方や適当とされるその贈り先の違いから，教会コミュニティーやその発展についての異なる考え方がうかがわれる。

ヒルサイド教会では，あらかじめ収入の一部を準備しておく計画的寄付が重視されている。寄付をする対象は，自分たちの信仰の指導的立場にあるメノナイト教会機関や教会が考えられている。また，寄付によって福音を伝道する活動を支援することも奨励され，キリスト教に目覚める人とのつながりを築き上げようとしている。

フェアビュー教会の寄付をめぐる会話においても，メノナイト教派の活動への理解と支援の様子がうかがえる。しかしここでは信仰上のリーダー的存在として，メノナイト教会組織を計画的な寄付で支援するといった面はそれほど強調されていない。むしろ，信仰の表現として自発的に寄付する態度が大切とされる。寄付の対象もキリスト教伝道を中心とするものではない。むしろ，メノナイト教派が行ってきた災害復興や精神病患者に対する支援等に，寄付を通じて参加することが奨励され，その経験をもとに信仰心を深めていく点が強調されている。メノナイト教派の，そしてキリスト教の信者としての認識とともに，社会の一員としてのよりよいコミュニティーを支援していこうとしている様子がうかがわれる。

寄付から見られるこのような違いは，各教会のメノナイト教派内や教会内での動きや対応を理解する上で役立つ。ヒルサイド教会では礼拝のスタイルや同性愛者への対応において意見の対立がみられた。これらは福音主義や伝道を全面に打ち出す上で，メノナイト教派との関係や伝統をどう考えるかという点での意見の違いがその背景あり，ヒルサイド教会での寄付の 2 つの側面，すなわち指導的な立場としてのメノナイト教会組織へ支援とキリスト教一般の福音伝道活動への支援との関係をどうとらえるのかとの関係するものである。一方フェアビュー教会では，寄付の重点として自発的で，広く人道的な支援や社会正義実現が重視されていた。人道的支援活動はメノナイト教派が長年活動してきた布教以外の社会福祉活動と関係があり，その点からメノナイトとしての歴史や宗教的背景を維持しようとする傾向がある。同性愛者への対応もそういった観点から取り組まれており，ヒルサイド教会とは異なった対応となっている。

メノナイト教派の 2 つの教会を中心に考察したが，寄付の実践や寄付に対する宗教的解釈は，II で述べたような年齢や教派所属といった信者の特徴に簡単にまとめられるものでも，回心の追体験としての高額で即興的な寄付に代表されるものでもなく，様々な形がありうる。そして宗教的な寄付をめぐる考え方を詳しく見てみることは，時として信者の人たちが自分たちの宗教コミュニ

ティーをどのように位置づけしているのかに考察する一つの手掛かりを与えてくれる。そしてそれは，本稿の冒頭で取り上げたビデオにあるようなメノナイトはいったい誰なのかという問いへの答えの模索の様子をうかがわせてくれるものの１つといえる。

註

[1] http://www.mennoniteusa.org/about-us/who-are-the-mennonites/
[2] たとえば Osteen (2002), Parry (1986)など。
[3] 寄付という表現に比べ，献金，お布施という表現はどちらかというと金銭を贈る側と受け取る側との間の上下関係が強調される場合が多い。たとえば，キリスト教会で集められる寄付は神に贈られるものと解釈されるので，献金と呼ばれることが多い。
[4] たとえば Peifer (2010)。
[5] たとえば Iannaccone (1999), Stark and Finke (2000)など。
[6] Bialecki (2008), Coleman (2004), Harding (1992) などがある。福音主義派（Evangelicals）は原理主義派の教会や宗教的保守派右派といった様々なグループが含まれることがあるが，一般的にプロテスタント教会や教会員の中で特に聖書の教えが絶対で誤りがないことや個人的にイエスキリストを救い主として受け入れたという回心体験などを重んじるキリスト教会や信者を指し，彼らから見たキリスト教観や世界観を広める運動や活動に積極的な傾向がある。
[7] たとえば，身ごろが２重になっているケープドレスと呼ばれる成人女性の服や，教会員の女性は髪の毛をカバリングと呼ばれるもので覆っているなどの特徴がある。
[8] Kraybill and Hostetter (2001)を参照。
[9] ここで用いるコメントやそのほかのデータは 2004 年から 2005 年にかけてと 2013, 2014 年の夏季におこなった現地調査（参与観察と個別，グループでの聞き取り調査）と関連資料の分析に基づく。
[10] たとえば箴言 3:9，レビ記 23:10-14 などでは収穫した初穂を神にささげることの記述がある。またレビ記 27:30-33，民数記 18:26 では収穫や仕事で得たものの十分の一は神のものであるとの記載がある。
[11] 10 パーセントという設定は tithes (十分の一税)に由来しており，しばしばキリスト教会への寄付の目安として用いられる。十分の一献金や十一献金などの名称で呼ばれることもある。
[12] このほかに，メノナイト教会関連書物でも一定の額をあらかじめ取り置き，寄付することの重要性が訴えられている場合がみられる。たとえば Miller (1991)。

引用文献

Bialecki, J. (2008). Between stewardship and sacrifice: Agency and economy in a Southern California Charismatic church. *Journal of the Royal Anthropological Institute (N. S.)*, 14, 372–90.

Brekke, T. (1998). Contradiction and the merit of giving in Indian religions. *Numen* 45 (3), 287–320.

Coleman, S. (2004). The Charismatic gift. *Journal of Royal Anthropological Institute (N. S.)*10 (2), 421–42.

Dyck, C.J. (1990). Nonconformity. In C.J. Dyck and D.D. Martin (Eds.), *The Mennonite encyclopedia*, Vol. 5, (pp.635–6). Scottdale, PA: Herald Press.

Giving USA (2014). *Giving USA 2014: The annual report on philanthropy for the year 2013 digital package*. Retrieved from http://store.givingusareports.org/

Gombrich, R.F. (1993). Buddhism in the modern world. In E. Barker, J.A. Beckford, and K. Dobbelaere (Eds.), *Secularization, rationalism, and sectarianism: Essays in honor of Bryan R. Wilson*, (pp. 59–80). Oxford: Clarendon.

Harding, S.F. (2000). *The book of Jerry Falwell: Fundamentalist language and politics*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

Iannaccone, L.R. (1999). Skewness explained. In M. Chaves and S.L. Miller (Eds.), *Financing American religion* (pp. 29–35). Walnut Creek, CA: Altamira Press.

Kanagy, C. (2007). *Road signs for the journey: A profile of Mennonite Church USA*. Scottdale, PA: Herald Press.

Kniss, F.L. (1997). *Disquiet in the land: Cultural conflict in American Mennonite communities.* New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.

Kochuyt, T. (2009). God, gifts and poor people: On charity in Islam. *Social Compass* 56 (1), 98–116.

Kraybill, D.B., and C.N. Hostetter. (2001). *Anabaptist world USA*. Scottdale, PA: Herald Press.

Laidlaw, J. (2000). A free gift makes no friends. *Journal of the Royal Anthropological Institute (N.S.)* 6, 617–34.

Mauss, M. (1990 [1925]). *The gift: The form and reason for exchange in archaic societies*. London: Routledge.

MacMaster, R.K. (1985). *Land, piety, peoplehood: The establishment of Mennonite communities in America, 1683–1790*. Scottdale, PA: Herald Press.

McCleary, R.M. (2007). Salvation, damnation, and economic incentives. *Journal of Contemporary Religion* 22 (1), 49–74.

Redekop, C.W. (1989). *Mennonite society*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.

Miller, L. A. (1991). Firstfruits Giving: Giving God Our Best. Scottdale, PA: Herald Press.

Osteen, M. (2002). Introduction: Question of the gift. In M. Osteen (Ed.), *The question of the gift: Essays across disciplines*, (pp. 1–41). London: Routledge.

Parry, J. (1986). The gift, the Indian gift, and the Indian gift. *Man (N.S.)* 21(3), 453–73.

Peifer, J. L. (2010). The economics and sociology of religious giving: Instrumental rationality or communal bonding? *Social Forces* 88 (4), 1569-1594.

Redekop, C.W. (1989). *Mennonite society*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.

Ruth, J. L. (2001). *The earth is the Lord's: A narrative history of the Lancaster Mennonite conference*. Scottdale, PA: Herald Press.

Stark, R., and R. Finke. (2000). *Acts of faith: Explaining the human side of religion*. Berkeley, CA: University of California Press.

(2015 年 1 月 30 日受付，2015 年 2 月 4 日受理)